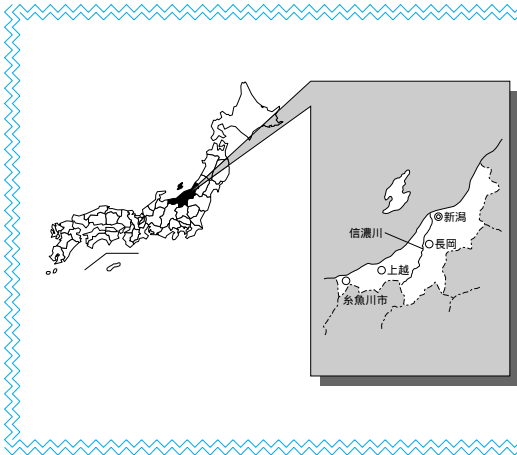


土木紀行

おやしらず 親不知 四世代道路 いといがわ 新潟県糸魚川市



天下の嶮・親不知

天下の嶮として知られる「親不知」は、新潟県糸魚川市青海から同市市振の総称であり、日本の屋根である北アルプスの北端が断崖をなして日本海に没する岩石海岸となっているのが特徴です。「親不知」を通る国道8号は、その大半が海岸沿いを通っており、非常に複雑で脆弱な地質となっている斜面を切り取って作られています。

親不知の由来

名勝・天下の嶮「親不知」は、断崖絶壁と日本海の荒波が旅人の行く手を阻み、わずかな波打ち際を駆け抜ける際に親は子を忘れ、子は親を顧みいとまがなかったことから、「親知らず・子知らず」と呼ばれるようになったと伝えられています。

また、一説には源平盛衰の昔、平清盛の弟・頼

盛が越後へ退隠し、夫を慕って越後へ向かった夫人がこの地を通りかかり、愛児を波にのまれ悲嘆にくれて詠んだ、「親知らず 子はこの浦の波まくら 越路の磯のあわと消えゆく」の歌から、この地を「親不知」と呼ぶようになったとも言われています。

道がなかった頃の親不知（第一世代）

旧街道の一つである北陸道は、現在の京都府から「親不知」を経て秋田県に至る日本海側の街道として大和時代に定められ、大和・奈良時代には税としての物資財貨を運ぶ道として使われました。江戸時代に入ると加賀藩の参勤交代の際に使われ、加賀街道とも呼ばれました。

北陸道のうち「親不知」を抜ける区間は、道とは名ばかりの海岸沿いのわずかな波打ち際が主な経路であり、旅人は悪天候の日には命がけで通行しなければなりませんでした。



写真 1 現在の国道8号（糸魚川市大字歌）



写真 2 渚の道（第一世代）

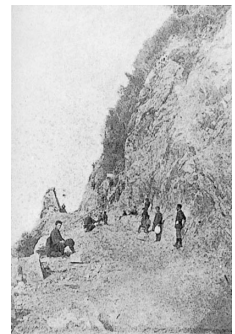


写真 3 明治の国道整備（第二世代）

親不知に道ができた（第二世代）

北陸道は、明治9年に全国の道路が国・県・里道に指定された際、道幅二間半（約4.5m）の三等国道に指定されました。

しかし、北陸道のうち「親不知」を抜ける区間は、道路整備が難しく、依然として危険な波打ち際は経路となっていました。明治11年の明治天皇の北陸巡幸をきっかけに道路整備が進められ、明治16年に人力車が通れる国道として開通しました。

このとき、国道開通を記念して絶壁の岩肌とのごとくやのごとしに「如砥如矢」と刻まれました。これは「砥石のように滑らかで、矢のように速く通れる」という意味で、当時の人々がこの国道開通をいかに喜んだかを知ることができます。

昭和の改修（第三世代）

昭和33年に開設した建設省北陸地方建設局（現在の国土交通省北陸地方整備局）は、「親不知」の悪路解消を目的に、現在の国道8号の整備に着手し、度重なる土砂崩れを克服して、昭和42年に全区間が2車線の道路となりました。

しかし、昭和43年以降、大雨等による数々の土砂災害が発生し、その度に通行止めを繰り返してきたことから、安全で円滑な道路交通を確保する



写真 4
絶壁に刻まれた「如砥如矢」



写真 5
昭和42年に完成した国道8号(第三世代)

ことを目的に、本格的な防災工事や大規模な局部改良事業が進められてきました。

その結果、近年では交通に支障のある災害は著しく減少しています。

北陸自動車道の開通（第四世代）

昭和63年には、北陸自動車道が全面開通し、国道8号とともに日本海側の大動脈として、その役割を担っています。

現在の親不知

「親不知」は、古代から明治にかけての海岸を通る渚の道、明治16年完成の道、国道8号、北陸自動車道の「四世代道路」として道の歴史を刻み続けてきました。

交通の難所としてルートを替えながら、道づくりの変遷を重ねてきた「四世代道路」は、旧道を活用した散策スポットである「親不知コミュニティロード」から一望でき、「如砥如矢」が刻まれた一枚岩も見ることができます。

この「親不知コミュニティロード」は、かつての苦労を今に伝える重要な道として昭和61年に「日本の道100選」に登録されたほか、平成19年には「親不知旧道」として土木学会選奨土木遺産に認定されています。

また、「四世代道路」は、貴重な地質や自然・文化を守り、かつ多くの人に訪れてもらうことを目的とした「糸魚川ジオパーク」内の「親不知ジオサイト」として指定されています。



写真 6 上空から見た「四世代道路」